



北海道公立大学法人  
**札幌医科大学**  
Sapporo Medical University

SAPPORO MEDICAL UNIVERSITY INFORMATION AND KNOWLEDGE REPOSITORY

Title 論文題目	Efficacy and Practicality of Opioid Therapy in Japanese Chronic Noncancer Pain Patients (日本における非がん性慢性痛患者へのオピオイド治療の実際と有効性)
Author(s) 著者	進藤, ゆかり
Degree number 学位記番号	甲第 2986 号
Degree name 学位の種類	博士 (医学)
Issue Date 学位取得年月日	2018-03-31
Original Article 原著論文	Pain management nursing 2019 Jun;20(3):222-231.
Doc URL	
DOI	
Resource Version	Author Edition

# 博士論文の要約

氏 名	進藤 ゆかり
<b>論文題名</b> オピオイド鎮痛薬治療をうけている慢性痛患者の生活への影響に関する研究	
1. 日本における非がん性慢性痛患者へのオピオイド治療の有効性と臨床的課題	
<b>研究目的</b> 本研究の目的は、オピオイド鎮痛薬を使用している非がん性慢性痛患者のオピオイド治療中に対する自己評価と痛みの程度が、日常生活における身体的、精神的、社会的状態、および対処行動にどのように関連しているかを明らかにすることである。	
<b>研究方法</b> 対象者：研究期間に2施設のペインクリニック外来を受診中で非がん性疼痛を持ち、オピオイド鎮痛薬治療中の患者であり、本人から研究参加の同意を得た。 調査期間：データ収集時期は平成26年3月～27年4月であった。 調査内容：外来診察時の待ち時間を利用して、面接聞き取り質問紙調査を実施した。 質問内容は、基本属性、疼痛部位、発症年月、痛みの程度は Visual analogue scale(VAS)を用い、健康に関する QOL は Short Form36(以下 SF36)を用いた。SF36 は、各種疾患患者に加えて、一般健康人に対しても用いられる QOL 尺度で、8つの下位尺度からなり、汎用性が極めて高く、多数の研究による標準値も報告されている。痛みの対処方略については、Coping Strategy Questionnaire(CSQ)を用いた。CSQ は、痛みに対する対処として認知と行動を区別して考えており、認知的対処方略には6つの下位尺度、行動的対処方略には2つの下位尺度があり、妥当性、信頼性が証明されている。	
<b>研究結果及び考察</b> 対象は男性17人、女性17人の合計34人であった。平均年齢は $60.8 \pm 15.8$ 歳だった(範囲 22-86 歳)。疼痛持続期間とオピオイド治療期間の平均はそれぞれ、 $11.3 \pm 9.6$ 年(中央値 9.1 年)、 $3.5 \pm 2.8$ 年(中央値 2.5 年)だった。便秘、眠気、めまい、下痢、吐き気といったオピオイドの副作用症状は、対象者の 32.4%、39.4%、44.1%、58.8%、63.6%に認められた。対象者は以前の非オピオイド治療よりも、現在のオピオイド治療を有意に効果があると評価していた( $P < .001$ )。 労災の有無やオピオイド療法継続年数や睡眠への支障、現在の痛みは、オピオイド治療の効果に負の相関があった( $P < .05$ )。 オピオイド療法の効果は、CSQ の認知的対処方略の下位因子である「破滅思考 Catastrophizing」尺度と負の相関があった( $r = -0.5, P < .01$ )が、一方で SF36 の下位因子	

である emotional functioning role(日常役割機能(精神)得点)尺度と正の相関があった ( $r=.38, P<.05$ ). モルヒネ投与量は、オピオイド療法期間、食欲、現在の痛みの程度と正の相関を示し、また、破滅思考尺度と正の相関があり ( $r=.36, P<.05$ ), SF36 の下位因子全てと負の相関があった。

#### 結 論

- 非がん性慢性痛患者は、オピオイド治療が以前の治療よりも有意に効果があると自己評価していた。
- オピオイド治療に対して評価が低い患者は、Catastrophizing な対処行動を示すことが多く、評価が高い患者は、emotional functioning role が高かった。
- 患者評価によるオピオイド治療効果とオピオイド投与量とは相関がなく、オピオイド投与量が増えても患者の治療評価は上がらない。
- オピオイド治療期間が長い患者ほど、有意にモルヒネ投与量が増えていた。  
Catastrophizing 得点はモルヒネ投与量が増加するほど、有意に増加していた。これは、破滅思考の多い患者には、オピオイド治療効果が少なく、投与量が増え、過剰投与の危険性が高いことを示唆した。